

今こそ考える “ひとつごとからわがごとへ”

松江市人権施策推進基本方針には3本の基本理念があります。その中の一つに“ひとつごとからわがごとへ”があり、様々な人権課題を「ひとつごと」のようにとらえるのではなく、自分とかわりをもって「わがごと」としてとらえ、解決に向けて行動するというねらいがあります。

そこで、今回はこの“ひとつごとからわがごと”をとりあげ、自分の心のなかに潜む無関心や思い込みについて振り返ってみます。そして、「わがごと」としてとらえるには、どのようにしたらよいのかその方法についても考えてみます。

ひとつごと

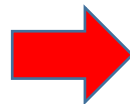
意識や態度

- 最初から否定して、話を聞かない。
- めんどくさいと思い、真面目にとらえない。
- 自分の回りでは聞かないという理由で、かわらない。
- 世間が作ったもので、私には関係ないと言う。
- 「私のせいじゃない。」と言って考えない。
- 確かめもしないで自分自身のイメージを先行させ、勝手に思い込んでしまう。
- 多様な立場の人の考えや生き方を受け入れない。

わがごと

意識や態度

- 相手の話を聞き、柔軟な考え方でよく知ろうとする。相手の気持ちを受け入れる。
- 相手の思いや悩みを知ること、自分自身を見つめなおす。
- 自分の偏見に気づき、それに向き合おうとする。
- 多様な立場の人を知り、その人の生き方を尊重する。
- ほっとけない気持ちになり、一緒に解決方法を考えようとする。



わかるけどね…



関係ないね。



そうだね。





“わがこと” としてとらえるには どのようにしたらよいのでしょうか？

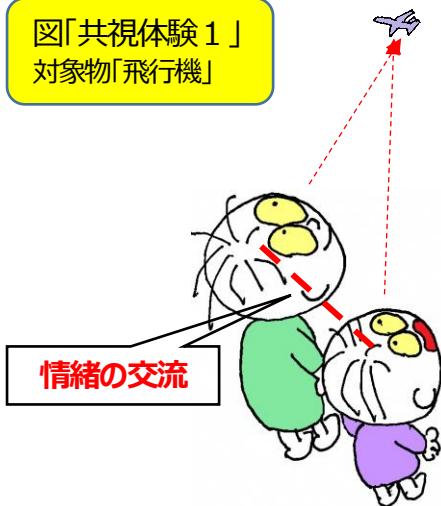
相手と並んだ姿を想像して、一緒に考える (共視体験の活用)

「ひとごと」ではなく、「わがこと」としてとらえるにはどのようにしたらよいのでしょうか。その一つの方法として「共視体験」を紹介します。「共視体験」とは「共同注視」とも言われ、人と人が「並ぶ関係」を作って「共に同じものを見る・眺める」ことをいいます。二人と対象物によって、三項関係ができます。そして、ここでは二人を結ぶ線が重要で、この線は気持ちを通い合わせたり、思いを察しあったりして、情緒的に重要な意味をもちます。

それでは、図を使って説明します。

図「共視体験 1」は、二人が同じ対象物（飛行機）を見ることによって三項関係ができています。

図「共視体験 1」
対象物「飛行機」



子どもが「あっ、飛行機だ。見て！」と一緒に散歩している大人に声をかけます。それを聞いた大人は、まず子どもの視線を追い、飛行機を探します。飛行機を見つけたときに、「あ、ほんとだね。どこに行くのかな。」とつぶやき、その後二人はしばらく飛行機を眺めて、お互いが想像の世界に入ります。子どもは、自分が関心をもった物を他者と共有します。私たちはこのように横に並んで、共に見る体験をたくさんし、心の交流をしています。

それでは、次に対象物を物ではなく、人権課題に置き換えた図「共視体験 2」を考えてみましょう。

図「共視体験 2」
対象物「人権課題」



ここでは、実際に並び合うことが難しい場合もありますので、並び合う関係を想像します。お互いが人権課題についての自分の考えや体験などを出し合います。関心をもったことがらが通い始めると、お互いの思いや考えを否定せず、相手を受け入れようとする。受容する関係ができてくると、少しずつ「わがこと」としてとらえようとする態度も育ってくるのではないのでしょうか。

“ひとごとからわがことへ”…「わがこと」としてとらえるためには、相手と向き合う関係ばかりではなく、並び合う関係を想像して寄り添い、相手が見ている世界と一緒に見る必要があります。

向かい合う関係から並び合う関係に

*参考：「共視論 母子像の心理学」北山修編 講談社 2005年

過去の OnlyOne は
松江市 HP に掲載しています

<http://www1.city.matsue.shimane.jp/shiminsoudan/jinken/onlyone.html>

松江市 人権啓発広報紙

